

第3章

宇都宮市のスポーツまちづくり

宇都宮市 魅力創造部 スポーツ都市推進課 課長 **黒崎 泰広**

1 スポーツで都市の魅力を創造する

(1) 組織を整え加速化させる

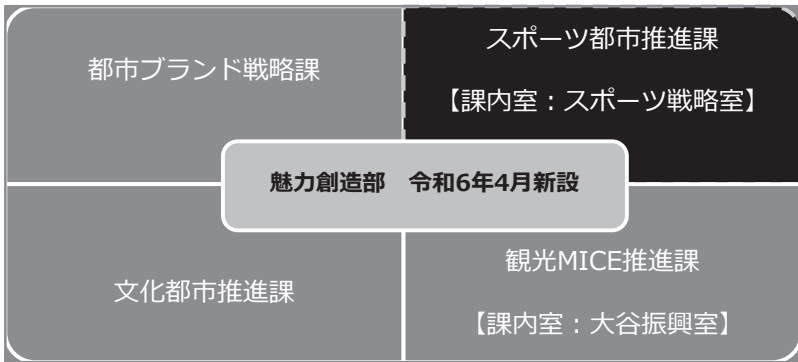
2024年（令和6年）4月宇都宮市に新たな組織が誕生した。市のブランド戦略の下、スポーツや文化、観光など多様な資源を結集し、市民のウェルビーイングの向上や都市の魅力の向上に資する取組みを一体的に推進するため、教育委員会事務局のスポーツ・文化行政を市長事務部局に移管し、「魅力創造部」を2012年度（平成24年度）の「市民まちづくり部」の設置以来、12年ぶりに新部として設置した。

同部には、市のブランド戦略と魅力の発掘・創出・発信を担う「都市ブランド戦略課」、スポーツ活動機会の創出やスポーツ施設の整備、国際的なスポーツイベントの誘致・開催を担う「スポーツ都市推進課」及び課内室の「スポーツ戦略室」、文化・芸術活動の充実や文化財の保存・活用・普及啓発を担う「文化都市推進課」、地域資源を活用した戦略的観光やMICEの誘致・開催の推進を担う「観光MICE推進課」及び課内室の「大谷振興室」を設置した。

組織を社会状況等の変化に適合させる必要性については、田尾¹によれば「組織がその目的を達成するためには、そして、より大量の、より上質のモノやサービスを得るために、さらに、クライアントなど外からのニーズに応えるためにはその枠組みをつくり替えなければならない。環境の変動に効果的に対応するためには、構造や制度を変更しなければならない。」とされており、宇都宮市においても、時代潮流の変化を捉えながら、新たな組織の整備を実施してきたところであり、こうした効果的な組織デザインのもとで、第6次宇都宮市総合計画に掲げたスーパースマートシティー（都市が持

1 田尾雅夫『組織の心理学』〔新版〕有斐閣 pp216-217

図表 3-1 「2024 年（令和 6 年）4 月に魅力創造部を新設」



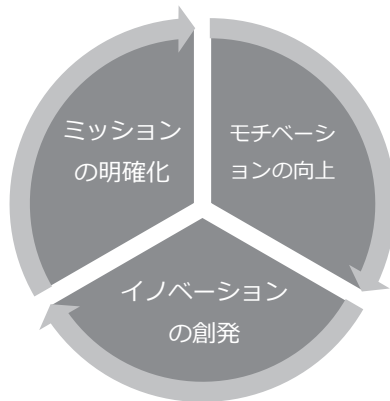
出典：筆者作成

続可能な発展をするために必要となる「社会」・「環境」・「経済」の3要素がバランスよく発展したまち）の実現に向けた諸施策を展開しているところである。

(2) 庁内スタートアップ的に課内室（時限的組織）を活用する

「宇都宮市課内室設置規則」では、臨時又は特別の事務を処理させるため、課に室又はセンターを設置する事が出来ると規定している。4月に設置した「魅力創造部」の成り立ちは、この臨時又は特別の事務を担当する課内室の制度との関連が深いものとなっている。宇都宮市における、ここ数年のスポーツ関連施策の担当組織の整備・再編については次のとおりである。2014年にそれまで、教育委員会で担っていたアジア最高位の国際サイクルロードレースであるジャパンカップサイクルロードレースの担当を経済部観光交流課に移管するとともに、総合政策部で担っていた地域密着型のプロスポーツクラブのホームタウンの担当や、スポーツを活用した地域活性化策の加速化を担う事を目的に「魅力創造室」を観光交流課内に課内室として設置した。これによりスポーツが有する多面的な価

図表 3-2 庁内スタートアップ的に新組織を活用する際に
見込まれる効果



出典：筆者作成

値をまちづくりに広範に活用し、都市の新たな魅力創りに向けた組織的な挑戦が可能となった。魅力創造部内の都市ブランド戦略課は総合政策部政策審議室内に課内室として設置した「ブランド戦略室」に端を発するものであり、現在、スポーツ都市推進課内に設置する「スポーツ戦略室」、観光 MICE 推進課に設置する「大谷振興室」なども合わせ、魅力創造部の成り立ちや現在の執行体制は課内室の機動的な活用が起点となっている。

庁内でスタートアップ的に「課内室」を活用する際の主なメリットとして以下の事項を示すことが出来る。

- ① 新たな組織立ち上げによる「ミッション」の明確化
- ② 特命的施策の所掌による「モチベーション」の向上
- ③ 挑戦（失敗）への許容による「イノベーション」の創発

新たな行政課題に対峙した際に、限られた行政資源のもとで対応して行くために比較的容易であるのは、既存の組織の拡充や増員等により手当てする事であると思われるが、組織を変化させる過程では、現行の評価や可能性の探索を伴うことから、試行から実行に

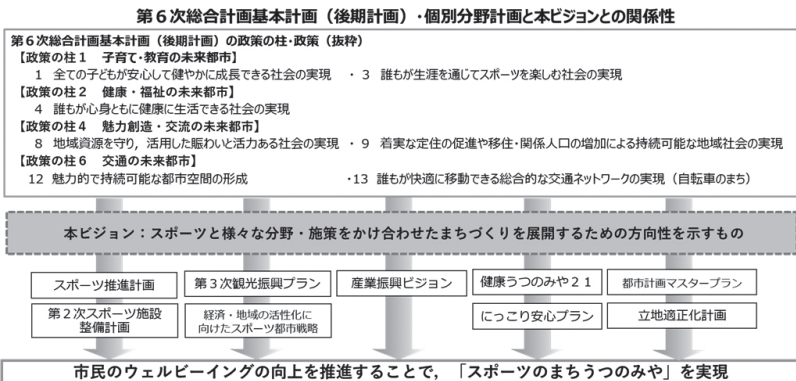
移す行程の中で、変化が導かれる可能性も高まるものと思われる。宇都宮市における、スポーツ関連施策の拡充については、課内室制度の活用を端緒として、「スポーツをまちづくり広範に活用する」ための組織的なアップサイクルが形作られつつあることを報告したい。

2 スポーツまちづくりの計画的な取組みに向けて

(1) スポーツまちづくりビジョンの策定と関連計画の取組み

前節では宇都宮市のスポーツ都市推進に向けた組織体制について概観した。本節では宇都宮市のスポーツまちづくりの推進に向けた諸計画についてその概略を示したい。2024年（令和6年）1月、宇都宮市では「スポーツのまちうつつのみや」の実現に向けて、スポーツと様々な分野を掛け合わせながらまちづくりを推進できるよう、第6次総合計画基本計画（後期計画）を補完する個別分野計画に対して、分野横断的に方向性を示すものとして「スポーツを活用したまちづくり推進ビジョン」（以下、「スポまちビジョン」という。）

図表 3-3 スポーツまちづくりビジョンと個別分野計画の関係性



出典：「宇都宮市スポーツを活用したまちづくり推進ビジョン」

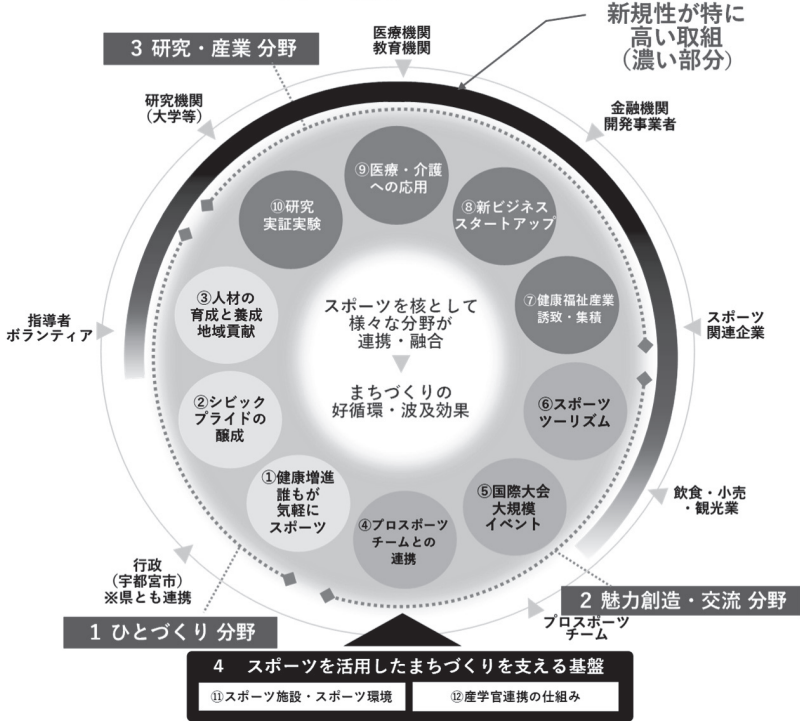
を策定した。

行政計画については、行政活動の効率性や整合性を担保するためにも必要性が広く認識されているところであるが、既往調査によれば自治体によっては、個別のスポーツ関連計画を策定していないなど、各自治体の状況に応じた対応が図られている。

宇都宮市においては、「スポまちビジョン」の策定に先立ち、「スポーツ推進計画」及び「第2次スポーツ施設整備計画」、更には「宇都宮市経済・地域の活性化に向けたスポーツ都市戦略」を策定し、「スポーツそのものの振興策」と「スポーツを活かした地域振興策」について目指すべき道標を示したうえで、計画的に取り組んできた。こうしたなか策定した「スポまちビジョン」においては、これまでの取組みも踏まえながら、行政をはじめ、大学等の研究機関や事業者などの多様な主体が連携するとともに、スポーツと様々な分野を連携・融合できる機会や場を創出し、スポーツが有する効果や価値を最大限高める取組みを推進することで、市民のウェルビーイングの向上やシビックプライドの醸成を図り、「スポーツのまちうつのみや」の実現の加速化を目指すこととしたところである。

この「スポまちビジョン」の取組みイメージについては、図表3-4に示したとおりである。子どもから高齢者まで、誰もがスポーツを通して自己実現が図られる「スポーツのまちうつのみや」の確立に向け、これまでの「ひとづくり」や「魅力創造・交流」の取組みをより充実することに加え、「ひとづくり」や「魅力創造・交流」の高度化・高付加価値化に寄与する「研究・産業」の取組みを推進するとともに、それぞれの取組みを下支えするスポーツ施設などの基盤を整備していくこととした。なお、具体的な取組みについては、個別分野計画の中でさらに検討・反映させる事としており、令和7年3月策定予定の「第2次宇都宮市スポーツ推進計画」においては、「スポまちビジョン」も踏まえながら新たに21事業を新規事業と

図表 3-4 宇都宮市のスポまちビジョン取組みイメージ
 <取組の構成イメージ>



出典：「宇都宮市スポーツを活用したまちづくり推進ビジョン」

して計上したところである。今後、産業や観光、健康、都市計画等の様々な分野の関連計画の改定の際においても、この「スポまちビジョン」を踏まえながら、スポーツが有する多面的な価値をまちづくりに活かすための具体的な施策を計上して行くこととなる。

「スポまちビジョン」では、スポーツを核として「ひとづくり」、「魅力創造・交流」、「研究・産業」といった異なる分野を連携・融合させながら相乗効果の発揮を目指すこととした中で、「ひとづくり」については、市域全体で、スポーツ施設の整備や地域スポーツの促

進などにより、全ての市民が身近な地域で気軽にスポーツや健康増進などに取り組める環境を整えていく方針を示したところである。

一方で「魅力創造・交流」や「研究・産業」といった取組みについては、市内の各圏域の特色や強みを生かしながら、高い経済効果をもたらす「新アリーナ」の整備支援や街中ならではの「魅せる」スポーツの展開などを図るとともに、スポーツを活用した研究開発・実証実験、新産業の創出などに向けた基盤づくりを強化していくこととし、必要な施設の立地を推進する事としている。また、こうした取組みと合わせ、スポーツ振興や健康増進、新産業の創出等に資す公共施設については、配置バランス・規模・機能の適正化や複合化などを推進していく事とした。

なお、「スポまちビジョン」においては、2023年8月に全線新設では国内で初めて開業した、次世代型路面電車である芳賀・宇都宮LRT「ライトライン」の沿線に、スポーツ施設や大学、産業団地等が立地するなど、ポテンシャルが高いことを踏まえ、「東部スポーツウェルネスライン」として設定したところであり、スポーツと様々な分野を掛け合わせた研究や産業活動など産学官連携の取組みを強化することとしたところである。

また、本市では東部スポーツウェルネスラインの沿線において、新アリーナ及び新屋内プールの整備を検討中であるとともに、仮称「宇都宮工業団地東地区」を新たな産業団地の候補地として選定し、新たな企業立地に向けた取組みを進めるなど「ライトライン」の開業を契機として、市が目指すネットワーク型コンパクトシティの形成に向けたまちづくりを進めており、その新たなまちづくりの中核となって行く事を期待されているのが、これまで以上の「スポーツの多面的な価値の活用」であり、こうした新たな取組みと合わせ、以下で紹介する既存のスポーツコンテンツの更なる磨き上げも含めて重層的にスポーツを活用したまちづくりを推進して行く。

図表 3-5 宇都宮市の圏域の特色と
東部スポーツウェルネスラインについて

	圏域の特色等
A：中心部	・ジャパンカップやFIBA3x3など国際レベルの大会や大型イベントを開催。街中ならではの「魅せる」スポーツにより、賑わい創出や市街地の活性化等を積極的に展開。
B：北西部	・大谷やろまんちっく村、森林公園など、観光スポットや交流施設、自然体験型スポーツ環境が集積。 ・北西部地域における生涯スポーツの受け皿として、地域体育施設の整備に取り組む。
C：北東部	・河内総合運動公園には、ドリームプールかわちなど北東部の拠点となるスポーツ施設が集積。プロサッカーチームも活動。河内総合福祉センターなどの健康増進施設あり。
D：南部	・栃木県総合運動公園では、栃木県による総合スポーツゾーンの整備促進など、新たな地域の顔となるスポーツ・レクリエーションの拠点として形成。国体レベルのスポーツ施設が集積。
E：東部	・ライトライン沿線には、複数の大学や産業団地、多様なスポーツ施設等が集積している。 ・ライトライン開業により交通利便性が高く、トランジットセンター周辺等で地域特性に応じた拠点の形成が図られるなど、ポテンシャルが高まっている。



出典：「宇都宮市スポーツを活用したまちづくり推進ビジョン」

3 宇都宮のスポーツコンテンツ

(1) 国際スポーツイベント開催とホームタウンスポーツの振興

広く関係者が一体となって「スポーツ立国」を目指すための指針として、2022年（令和4年）3月に策定された国の第3期「スポーツ基本計画」においては、「つくる／はぐくむ」・「あつまり、ともに、つながる」・「誰もがアクセスできる」といった視点のもと、策定から5年間で総合的かつ計画的に取り組む施策として、「スポーツ界におけるDXの推進」や「国際競技力の向上」など12の項目が計上されている。これらの項目の中において、とりわけ地域経済の活性化の基盤となるスタジアム・アリーナ施設の整備やスポーツ団体と他産業とのオープンイノベーションによる「スポーツの成長産業化」や「スポーツによる地方創生、まちづくり」といった項目については、各自治体においても国の取組指針を参酌しながら、全国で独自の取組みが進められている事と思われる。こうしたなか2017年に策定された国の第2期スポーツ基本計画が「スポーツ」と「国」の関連が色濃く出た計画であった事に比して、第3期スポーツ基本計画は「スポーツ」と「地方」の関連が強く示されたものとなり、国におけるスポーツ政策の力点の変化が明確となった²。

計画では「全国各地域がスポーツによる地方創生、まちづくりに取り組み、それらを将来にわたって継続させ、各地に定着させるよう、促進する。その結果として、スポーツ・健康まちづくりに取り組む地方公共団体の割合を2026年度末に15.6%から40%とする」と具体的なKPIが明記されており³、その達成に向けては全国の自治体が計画の内容を参酌し、施策を展開していく必要がある。

こうした中、「スポーツ」×「地方創生」のメルクマールは多種

2 笹川スポーツ財団『スポーツ白書 2023 次世代のスポーツ政策』（2023）p.203

3 笹川スポーツ財団 前註（2）pp.203-205

多様であるが、その一つとなり得るのが、各地域の独自性が反映された地域固有のスポーツコンテンツの存在にあると思われる。

現在、宇都宮市においては、スポーツの成長産業化やスポーツによる地方創生等の取組みについて、様々なスポーツコンテンツを活かしながら取組みを進めているところであり、ここでは宇都宮市における幾つかのスポーツコンテンツを紹介する事としたい。

なお、本市の当該分野に係る取組みについては、「新たな公共私連携～スポーツを通じたまちづくり～」において、「宇都宮版国際大会のつくり方」として既存の都市インフラを活用した国際大会の誘致・開催手法、また、宇都宮市を拠点するホームタウンチームとの協働したスポーツを通じたまちづくりについて既述させていただいたので、詳細については併せて参照頂きたい⁴。

(2) スポーツ都市戦略の策定による効果の共有

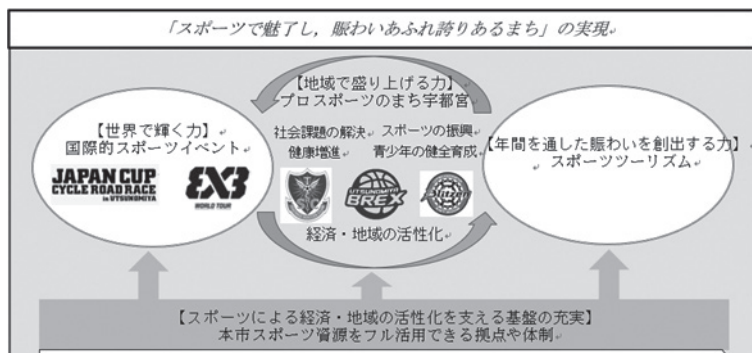
スポーツイベントの開催にはプラスマイナス両面のレガシーが存在する。イベントを一過性のものとせず、その開催効果を最大限活用していくためには、イベント自体の開催目的を明確にしたうえで、効果を引き出していく必要があることから、宇都宮市では「スポまちビジョン」の策定に先駆けて、2022年3月に「宇都宮市経済・地域の活性化に向けたスポーツ都市戦略」を策定し、宇都宮市で培ってきたジャパンカップサイクルロードレース等の本市経済・地域の活性化に資するスポーツイベント等を貴重な地域資源として捉え、国内外のスポーツを取り巻く環境の変化を踏まえながら、こうしたスポーツ資源の更なる活用促進や、新たなスポーツ資源の創出等に取り組むなど、これまでの取組成果を踏まえた独自の戦略により、

4 黒崎 泰広 (2020) 「スポーツを通じた都市の魅力創造」『都市とガバナンス』第33号 日本都市センター、pp.16-26
https://www.toshi.or.jp/app-def/wp/wp-content/uploads/2020/04/reportg33_2_2.pdf

「スポーツ」による経済・地域の活性化を推進することとした。現在、同戦略に基づき以下の事項に重点的に取り組んでいるところである。

- ① 国際的スポーツイベントの磨き上げによるブランド力向上【世界で輝く力】本市がこれまで築き上げてきた世界に誇る資源を、I F（国際競技連盟）と連携しながら更に磨き上げ、世界に魅力を発信することで、本市の「都市ブランド力」を向上させる。
- ② 市民が誇れる「プロスポーツのまち」の確立【地域で盛り上げる力】本市をホームタウンとする3つのプロスポーツチームと、スポーツを活用したまちづくりのパートナーとしてこれまで以上に緊密に連携するなど協働の仕組みを築くことで、「シビックプライド」を醸成する。
- ③ 本市独自のスポーツツーリズムの展開【年間を通した賑わいを創出する力】本市独自の国際的スポーツイベント等を活用し、市民はもとより多くの来訪者を迎え入れ、スポーツによる年間を通した賑わいを創出することで、本市の「地域経済の活性化」を図る。

図表 3-6 宇都宮市経済・地域の活性化に向けたスポーツ都市戦略



出典：「宇都宮市経済・地域の活性化に向けたスポーツ都市戦略」

- ④ スポーツ資源を最大限に活用できる基盤の構築【スポーツによる経済・地域の活性化を支える基盤の充実】国際的スポーツイベントやプロスポーツチーム等スポーツ資源を最大限に活用するための基盤を構築することで、持続的な賑わい等を創出する。こうした戦略に基づき「目指すべき姿」を事業担当者をはじめとする関係者が共有することにより、「スポーツをまちづくりに活用する」という軸を据えた取組みを可能としている。

(3) 宇都宮のスポーツコンテンツ

次に宇都宮のスポーツコンテンツから具体的に2つの世界大会を紹介する。

ア 宇都宮ジャパンカップサイクルロードレース



宇都宮ジャパンカップサイクルロードレースは、日本で唯一、国際自転車競技連合（UCI）より、ワールドツアーに次ぐ“プロシリーズ”に認定された、アジア最高位のワンデイロードレースとして、世界で活躍するトップ選手たちの本気の走りを間近で観戦することが出来るレースであり、2024年大会では3日間延べ13万4千人を超えるロードレースファンを集客する国際大会である。この宇都宮ジャパンカップサイクルロードレースの原点は、1990年9月に世界最高峰の自転車ロードレース「世界選手権自転車競技大会」をアジアで初めて宇都宮市がホストした事を端緒とするものであり、その2年後の1992年11月、世界選手権のメモリアル大会としてジャパンカップロードレースを開催した。UCIプロシリーズの最終戦となる宇都宮ジャパンカップサイクルロードレース。大会は3日間に渡り、初日には全出場チームが顔をそろえる「チームプレゼンテーション」、2日目はJR宇都宮駅西口の大

図表 3-7 宇都宮ジャパンカップサイクルロードレースのレースシーン



出典：宇都宮市

通りを周回するハイスピードレース「宇都宮ジャパンカップクリテリウム」、最終日となる3日目は標高差185mの古賀志林道を疾走する「宇都宮ジャパンカップロードレース」を開催しており、大会関連イベント等も多数実施していることから、宇都宮ジャパンカップはまさに「自転車のまち宇都宮」が誇る年に一度の自転車の祭典となっている。

イ FIBA3x3 ワールドツアー

『FIBA 3x3 World Tour』は、国際バスケットボール連盟が主催するクラブチームの世界王者を決定するツアー形式の国際大会である。

一年間世界各都市で大会が行われ、年間を通して勝ち抜いた上

FIBA 3x3
WORLD TOUR
UTSUNOMIYA OPENER

位チームが World Tour FINAL に進出し世界一を決定する。出場するのは前年の優勝チームをはじめとする世界ランキングでもトップ 10 に入るほどの各国を代表するトップチームであることから、3x3 界最高峰の大会となっている。宇都宮市では 2016 年から継続的に World Tour を開催しており、2019 年には世界一を決める FINAL を開催し、また 2022 年からはワールドツアーの開幕戦の開催地として選ばれ続けている。開幕戦 (Utsunomiya Opener) が行われるのは 2024 年で 3 年連続となっており、また 2025 年～2028 年まで、合計 7 年連続で開幕戦を宇都宮で行うことが、IF である FIBA と合意されている。

昨年、日本から『FIBA 3x3 World Tour Utsunomiya Opener』に開催都市枠として出場した地元チームである UTSUNOMIYA BREX.EXE は、World Tour において日本チームで初めての予選突破・決勝トーナメント進出を果たすなど地元開催の国際大会を盛り上げている。

図表 3-8 FIBA 3x3 World Tour の開催シーン



出典：宇都宮市

また、こうした大会開催のみならず、「3x3」を活かしたまちづくりを推進するため、宇都宮市内小中学校への 3x3 公式球の配布

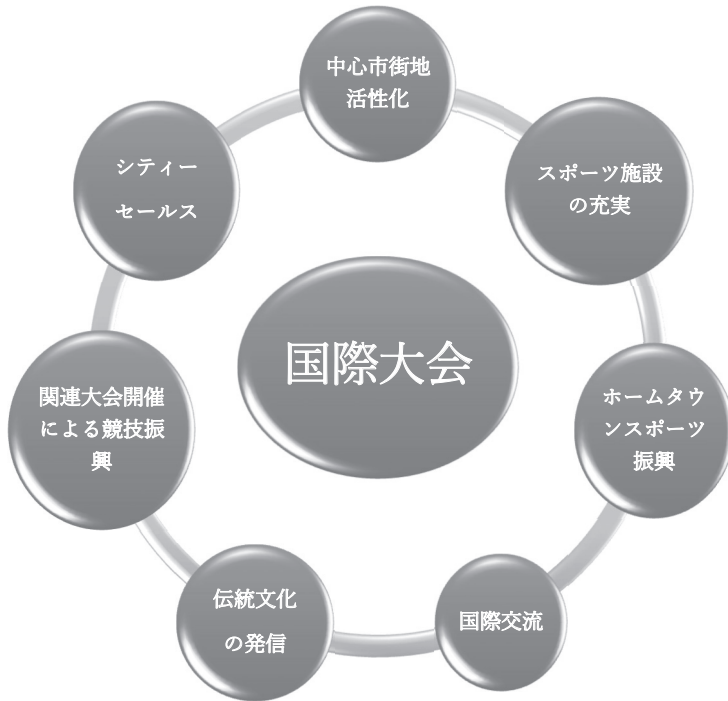
や屋外バスケットゴールの県内設置、小学生対象の「宇都宮市長杯」U12 3x3 大会の開催、関東各都県を代表する小学生対象の「3x3 Jr.CUP」、更には大会出場選手が小学校を訪問し、子どもたちとの交流を行う学校訪問事業など、子どもたちが3人制バスケットボールに親しみやすい環境づくりにも取り組んでいる。

(4) スポーツコンテンツが創出する多様な効果

こうしたスポーツイベントの開催に伴うレガシー創出については、オリンピック・パラリンピックをはじめサッカーやラグビーなどのワールドカップ等のメガスポートイベント開催時の取組みが耳目を集めるところであるが、地方都市における各種の大会においても様々な開催効果を創出することが可能である。30回を超えて開催を重ねる宇都宮ジャパンカップサイクルロードレースは、3日間の大会期間中に13万人以上（2024年10月開催）を集客し、経済波及効果は約35億円となるなど経済的にも大きな開催効果を創出している。

また、国際大会等の開催に伴う多様な効果については、図表6に示したように、大会を契機とした新たなスポーツ施設の整備（宇都宮市では現在、複数の地域で3人制バスケットボール専用コートの整備を進めている。）や小学生を対象とした新たなカップ戦である市長杯の開催による競技振興など多岐に渡る。これらの効果の導出と拡大に向けたポイントは複数あるが、最も肝要である事の一つは、極めてシンプルであるが、「大会を継続的に開催」することにあると思われる。大会を安定的かつ継続的に開催し続けるためには、大会に関わるステークホルダーの納得感や期待感、地元のサポートなどが必要であり、大会を継続して行くなかで、こうした関係者間の多様な「議論や気づき」が大会を磨き、新たな効果も創出する事に繋がっている。また、継続的な開催を通じて、国内の中央競技団

図表 3-9 市内での国際大会開催に伴う多様な効果



出典：筆者作成

体はもとより、国際競技団体（International Federation）とも信頼関係を築いて行けるようになり、大会の開催効果を拡大するための様々な取組み等についても企画・実施する事が可能となる。こうした暦年の取組みはスポーツを活用したまちづくりの地層として、地域内に蓄積される。こうした積み重ねは、競技の普及や振興を期すIF等にとっても有益であることから、ここに双方にとってメリットがある「Win - Win」の関係が成立するという事となる。なお、付記するならば、こうした関係構築には首長の強いリーダーシップが欠かせず、トップ同士のリレーションシップは事業に信用力と推

進力をもたらすための重要なポイントであると言える。

4 むすび

近年、スポーツまちづくりの射程とする領域については拡大の一途をたどっており、多くの自治体はその効果を最大化すべく知恵を絞っている。JリーグやBリーグを始めとした、プロクラブを核としたホームタウンスポーツの更なる振興に繋がる「スタジアム・アリーナ等を起点としたまちづくり」の取組み等を地域活性化の核とするための未来に向けた投資は、リーグのライセンス制度の存在と相まって各々のホームタウン自治体にスポーツまちづくりに向けた前向きな取組みと相応の覚悟を求めるものでもある。宇都宮市においても新たなアリーナの整備に向けた支援をはじめ、スポーツまちづくりの更なる進展に向けた様々な取組みについて、官民を挙げて推進しているところであり、こうしたスポーツまちづくりの一環として実施するハード・ソフト両面からの基盤づくりの一例を紹介し、むすびとしたい。

まず、先述のライトライン沿線における新たな拠点として、アーバンスポーツを核としながら、多くの人が集い、にぎわい、楽しめる「東部総合公園」を2026年3月の開園を目指しパークPFI事業により整備中であるとともに、市の北西部においては、スポーツ施設としては本市初のデザインビルド方式により、生涯スポーツの受け皿となる体育館やBMXのダートコースの整備に着手している。

また、こうしたハード整備を進めつつ、先述の「スポまちビジョン」の中で定義した「スポーツを活用したまちづくりを支える基盤」の具体的な施策として、スポーツオープンイノベーションを担う組織体「(仮称) スポーツのまちうつのみや推進プラットフォーム【みやSOIP】」の2025年3月中の設立を目指し、地元ホームタウンク

ラブやスポーツ・観光関連団体、大学、スポーツ関連民間事業者、自治体等をメンバーとする準備会を設置し、設立に向けた組織のあり方等を含めた準備を進めているところである。スポーツを活用したまちづくりを推進し、市民のウェルビーイングを向上させていくために、スポーツが有する多面的な価値を捉えながら、経済的にも持続可能な施策展開を図ることのできる推進体制を整えることがポイントであり、全国のロールモデルとなれるようなプラットフォームの設置を目指しているところである。

こうした新たな挑戦も含め、今後とも公民の共創により、スポーツが有する効果や価値を最大限高め、スポーツを生活の一部として感じられるまちづくりの推進を通じて、スポーツを通してみんなが輝きつなげる魅力的なまち「SPORTS in LIFE UTSUNOMIYA」を目指して行きたい。